

アイヌ生活文化再現マニュアル



財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構



アイヌ生活文化再現マニュアル

# 編む

—ゴザ—

財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構



## 発刊にあたって

財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構は、平成9年7月の設立以来、アイヌ文化の振興、アイヌの伝統やアイヌ文化に関する知識の普及と啓発、アイヌ文化等に関する研究の推進や助成などの各種事業を実施しております。

そうした事業の一環である「アイヌ生活文化再現マニュアル作成事業」は、アイヌの伝統文化を、映像や音声、文字などによって記録し、アイヌの人々をはじめとして、広く一般の人々や研究者の利用に供することにより、アイヌ文化の伝承・保存を図ることを目的としています。

本マニュアルがより多くの人々の利用に供され、アイヌ文化の振興が推進されるとともに、我が国の多様な文化の一層の発展が図られれば幸いです。

## 目 次

はじめに

～キナ～

### 道具・材料

たて糸を準備する .....	11
たて糸を錘り石に巻く .....	11
ガマの扱い .....	13

### 編み方

表編み .....	15
裏編み .....	16
編み始め .....	17
ふちの処理 .....	19
編み終わり .....	20

～チタラベ～

### 道具・材料

#### 編み方

文様の布処理 .....	25
ジグザグ文様 .....	26
たて糸の処理 .....	29

～ニカプンベ～

### 道具・材料

材料の準備 .....	33
ガマの採取 .....	33
ガマの干し方 .....	36
染め .....	38
染料をつくる材料 .....	38
黒に染める材料 .....	38
茶に染める材料 .....	39
染めの手順 .....	39

## 編み方

編み始め .....	42
ふちの処理 .....	45
1目ジグザグ文様 .....	46
文様を作る .....	48
編み終わり .....	53
たて糸の処理 .....	56
おわりに .....	60
参考文献 .....	61
ゴザを収蔵・展示している施設 .....	62



## はじめに

アイヌの女性は、身近にある植物を材料として、さまざまな生活用具を作りました。ガマやフトイを材料としたゴザもそのひとつです。

ゴザには、文様の入らない無地のものと、文様入りの2種があります。無地のゴザは、敷物として使われるほか、寒さを防ぐために窓に掛けたりしました。文様入りのゴザは、イオマンテ（熊の霊送り）やチセノミ（新築祝い）などの儀礼に用いられるとともに、イタオマチブ（板綴り船）の帆にも利用されました。

これらのゴザは、江戸時代、「キナ」あるいは「蝦夷キナ」と呼ばれ、アイヌの人々の重要な交易品でもありました。

このマニュアルでは、計良智子さんが「キナ」と「チタラペ」を、貝澤竹子さんが「ニカブンペ」を、それぞれ製作します。



キナ



チタラペ



ニカブンペ

ゴザは、大きさや文様の有無、用途や材料、地域によって呼び名が異なっています。  
呼称の一例を紹介します。

キナ、トマ、チタラペ、カムイノミチタラペ、カムイチタラペ、イナウソ、ボンニカプンペ、  
オニカプンチタラペ、ニカプンペ、オキタルンペ、ポロニカプンペ

#### 文様の一例



財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構所蔵

織田ステノさんによれば、秋はガマを刈り、1月・2月はカエカの月といって糸を作り、3月・4月はイテセの月といい、アイヌの女性がゴザ編みに励んだことが伝えられています。

でき上がったゴザは、ゴザ棚（トマトゥナ）に保管しました。ゴザ編みは、手仕事の中でも大変手間隙のかかる作業です。そのためか、たくさんゴザを保管してある家の女性は働き者と誉められたといいます。

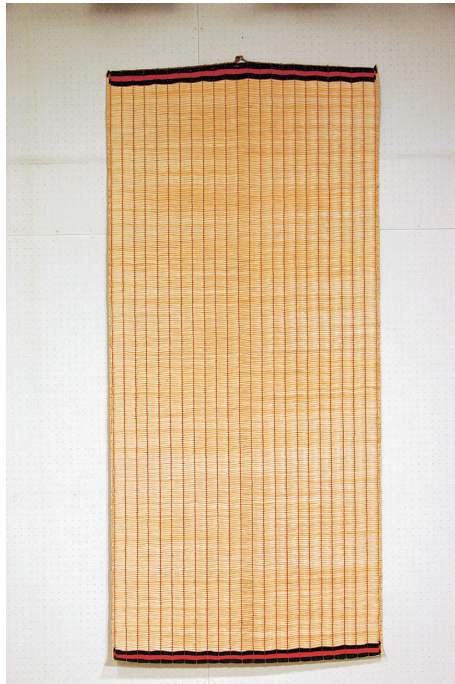
#### 「編む」に関するアイヌ語

カエカ：糸を撚ること  
イテセ：編む・ゴザを編む  
イテセカ：編み糸  
イテセニ：編み機

#### 織田ステノ (1902～1993)

静内町出身。アイヌ語を母国語として育つ。  
口承文芸をはじめとして生活文化全般を伝承する。

# キナ



幅95cm×長さ205cm

文様なしの無地のゴザをキナといいます。

ここでは計良智子さんが、織田ステノさんに習った方法を元に、ガマを使ってキナを製作します。ガマはアイヌ語でシキナといい、本当の草という意味があります。

ガマ（シキナ）

シ：本当

キナ：草



ガマ

写真1

## 道具・材料

・ゴザ編み機



写真2

・目盛り板 (目盛り幅 4 cm・24目)



上下に別の目盛りが刻まれているものもある

写真3

・錘り石 (ピツ) 48個 (目数の2倍)



写真4

・たて糸 (染めたたこ糸) 6 m



写真5

・ガマ



写真6

・木綿 (赤・黒) 2.5cm幅に裂いたもの



写真7

## たて糸を準備する

昔はシナの木の皮で作った糸をたて糸にしました。  
今回は、市販されている「たこ糸」を使います。

糸の長さの決め方

ゴザ（完成予定 2 m）の1.5倍を（表・裏）分

$$2\text{ m} \times 1.5 \times 2 = 6\text{ m}$$

糸の本数

刻み分の本数（24本）



写真 8

### たて糸を錘り石に巻く

たて糸の両方の先端に、それぞれ錘り石をつけます。

※ 糸の巻き方は、アイヌ生活文化再現マニュアル「編むーサラニャー 編」でも紹介しています。

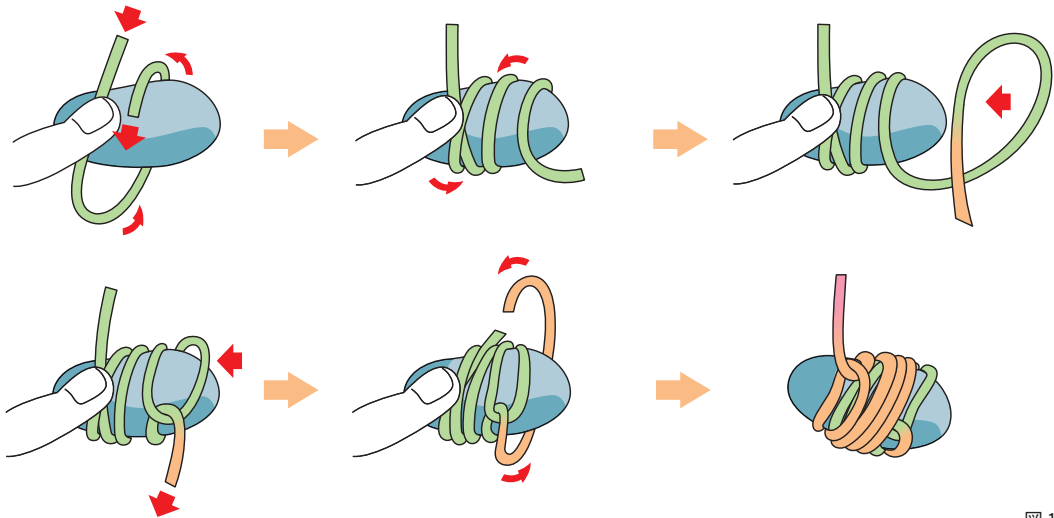


図 1

糸が途中でほどけても、床まで石が落ちないように、輪にした部分を押しさえるように巻きます。

石を巻いたたて糸の真中を、目盛り板の刻みにかけます。



写真 9-1



写真 9-2

## ガマの扱い

ガマは、乾燥した状態では折れやすくきれいに編むことができないので、その日に使う分を、前日に水で戻しておきます。



写真10



乾燥状態のうちに不要部分を切る 写真11



水になじませシートに包む 写真12



踏んだり、もんだりする 写真13

全体に水がなじんだら、余分な水分をとるためにシートに包み、立てておきます。



写真14

ガマの両ふちの部分は薄くなっているなので、あらかじめ取り除いておきます。(図2-①)

編む時には、1枚のガマをたてに裂いて使います。(写真15) 厚さが均等になるよう、細い場合は短いものも重ねて使い、太い場合は裂いて調整します。



写真15

ゴザの両はじに、ガマの根元の太い部分が編まれるようにします。(図2-④) 昔は、厚いゴザを編むために、2本ずつ使うこともありました。

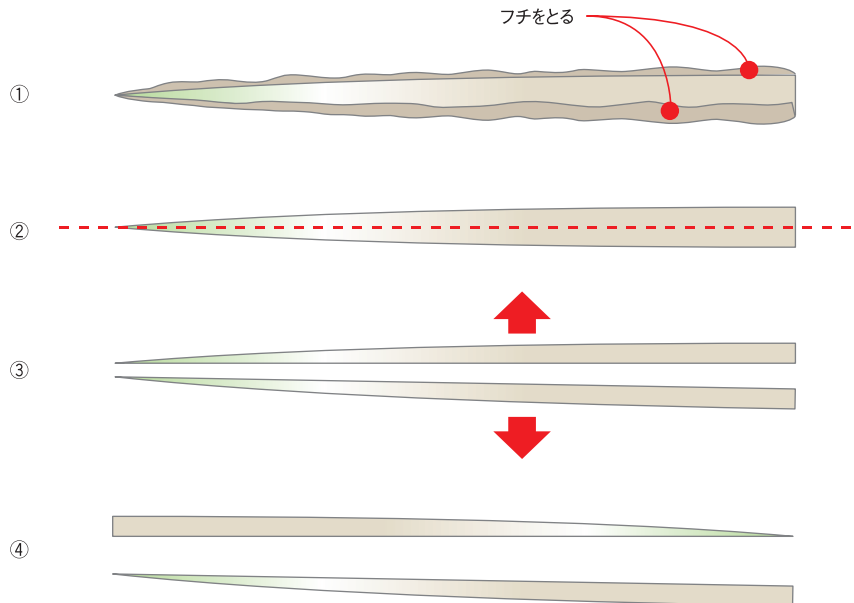


図2

## 編み方

### 表編み

ガマは目盛り板の傾斜に沿って置き、右から左に向かって1目おきに糸をかけていきます。(写真16) ゴザの表面が編まれることになります。糸は手前から後ろへ(図3-①)、後ろの糸を手前にかけ(図3-②) 次の目に進みます。

布の段は布のすぐ後ろにガマを入れます。



写真16

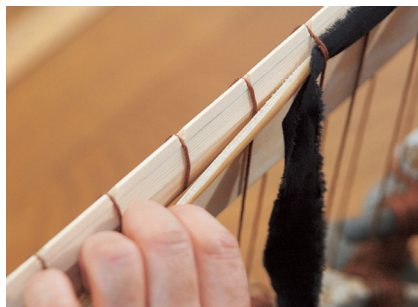


写真17

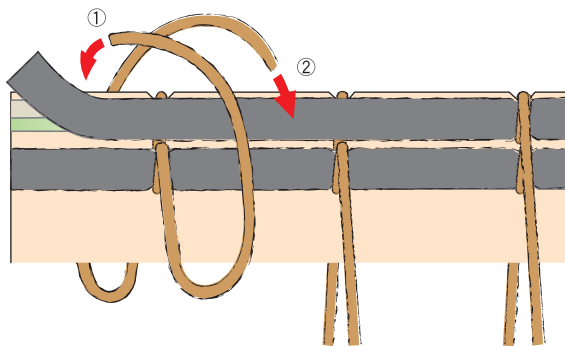


図3

## 裏編み

左から右に向かってゴザの真中まで表編みしたらガマを表編みの後ろへ差しこむように入れます。ガマの先端部分（青い部分）が裏面に出ることになります。（図4）

たて糸の扱いは表編みと同じです。1目おきに糸をかけますが、裏編みした段階ですべての「刻み」に糸がかかることになります。

右から左へ「行き」の場合    ゴザの真中で 表編み → 裏編み（図4-①）

左から右へ「戻り」の場合    ゴザの真中で 表編み → 裏編み（図4-②）

「行き」と「戻り」で2枚に裂いたガマを、互い違いに使って1段編んだことになります。

※今回のゴザの場合、真中とは12目と13目の間

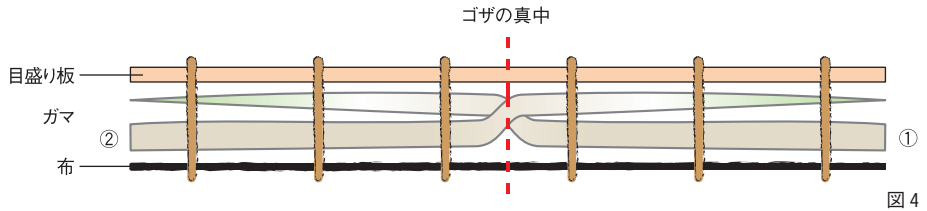


図4

## 編み始め

織田ステノさんの教えに習い、無地のゴザを編む時も編み始めに2段ずつ黒、赤、黒の順に布を入れて編みます。魔よけの意味があるといわれています。



写真18

目盛り板の傾斜に沿って、ガマ、黒い布の順に重ねて置きます。布を使う段は、裂いた布のほつれが外に出ないように、ガマを包むように内側に折ります。(写真20)

1目おきに、左に向かって編み進みます。



写真19

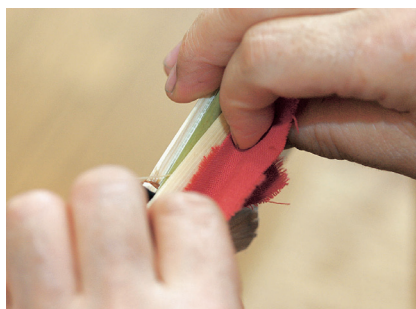


写真20

左から進む場合も同じ要領で編みます。



左から編んだ時の表編み

写真21

ガマは真中まで、布のすぐ後ろになるように入れていきます。1目おきに糸をかけます。真中からは、ガマが一番後ろになるように入れていきます。左からの戻りで、すべての目に糸がかかり1段編んだことになります。

赤い布の段も同じです。

布を使わない段も、表編み、裏編みで1段となります。

真中の目は交差したように編まれていきます。



写真22

表面はすべて白い部分で編まれます。



写真23

裏面は、真中から両はじに向かって、ガマの青い部分が編まれていきます。



写真24

## ふちの処理

2段編み終わったところで、ふちの処理を始めます。

1段目の布を内側にねじりあげ（写真25-1）、次のガマで押さえて糸をかけます。（写真25-2）  
3段目では2段目の布を、4段目では3段目の布を持ち上げることになります。

左はじめ同様に、内側にねじりあげて処理します。ガマが太すぎる場合は裂いて処理します。  
布を使った段は、布をねじりあげます。

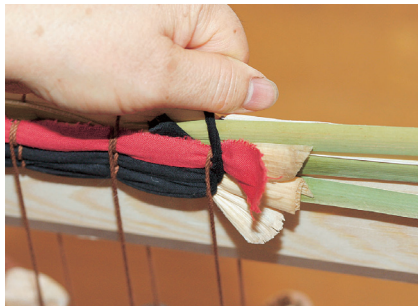


写真25-1

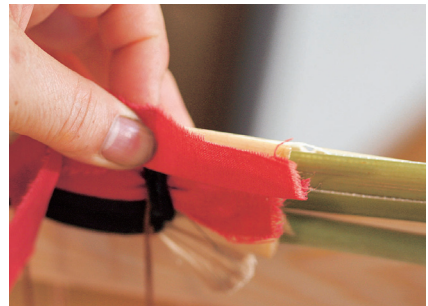
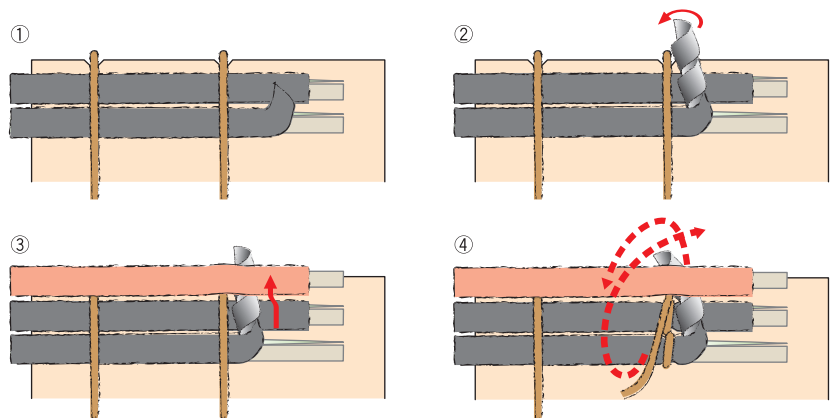


写真25-2



前の糸を後ろへ、後ろの糸を前へかける

図5

30～40cm編んだところで左右、ふちの処理をした残りの部分は5mmほど残して、切り落とします。



写真26

## 編み終わり

編み終わりは、始まりと同じように2段ずつ黒、赤、黒の順に布を入れて編みます。



写真27

布の段を編み終えたら、たて糸を1目ずつ玉結びにし、結び終えたら石をはずします。



写真28

1列目の2本を半分に分けて、ゴザの中央に向かって燃っていきます。



写真29

2列目のたて糸で、撚った糸を縛ります。糸は4本になります。(図6-③) 3列目まで同じ要領で行います。たて糸が2本ずつ増え、4列目で8本になります。

糸は最初に撚った2本から順に短くなるので、太さが均等になるよう最初の2本を切り落とします。(図6-⑥) 常に6本で作業します。



写真30

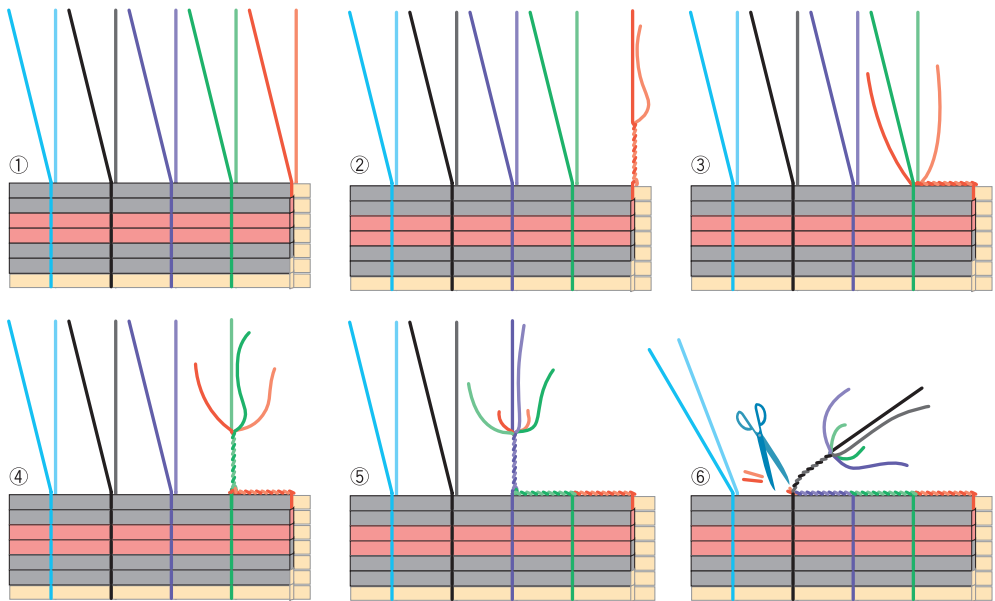


図6

左右からそれぞれ撚ってきた糸を真中で結び、撚って1本のひもにします。



写真31

今回は75cmに仕上げました。  
まるめたゴザをまとめるための長さです。



写真32

編んだゴザは、ふちの部分を踏んで厚みを整えます。



写真33

幅95cm、長さ205cmのキナが完成しました。

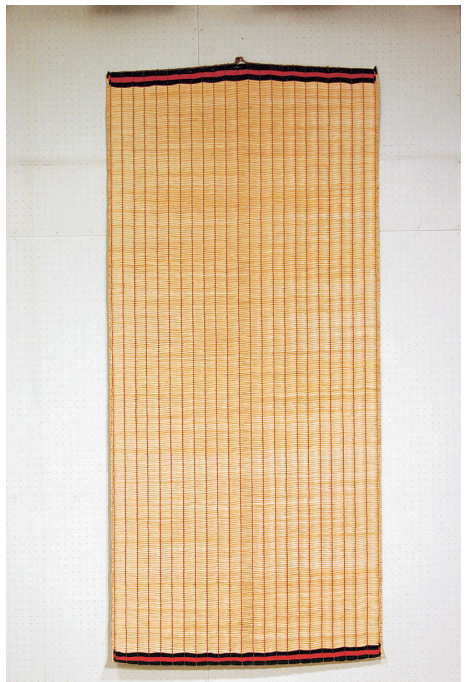


写真34

# チタラペ



幅94cm×長さ224cm

布を編み込んで文様をつくるゴザーチタラペは儀式などで使うものです。

ここで紹介する編み方と文様は、織田ステノさんが伝承されたものです。

昔は文様を編み込むためにシナやオヒョウを染めたものを使っていましたが、手に入れることがむずかしくなり、木綿を使うようになりました。

古いものの中には、メリンスを使って編まれたものもあります。

## 道具・材料

- ・刻み目 3 cm幅×32
- ・たて糸（たこ糸） 7 m×32本
- ・石の数 64
- ・木綿（赤・黒）

文様は、黒5段、赤2段、黒5段、合計12段を基本にして作ります。5段ごと布を斜めにして編み込むジグザグ文様も、特徴のひとつです。無地のゴザと同じように、編み始め（写真2-①）にも布を使って15段編みます。16段目から文様の始まりです。



写真1

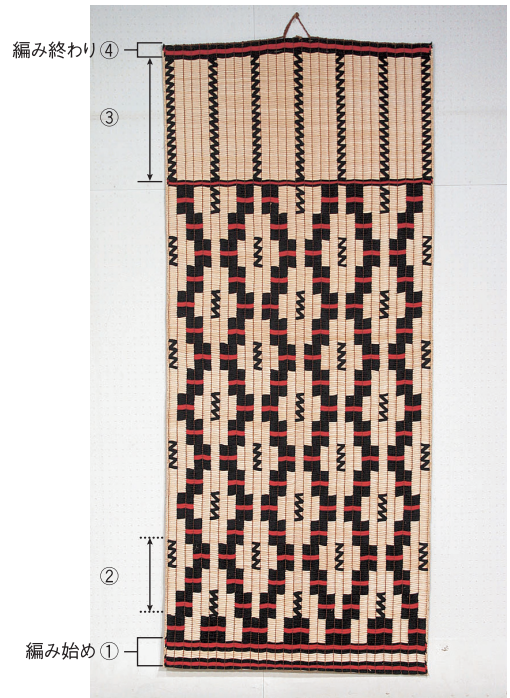


写真2

## 編み方

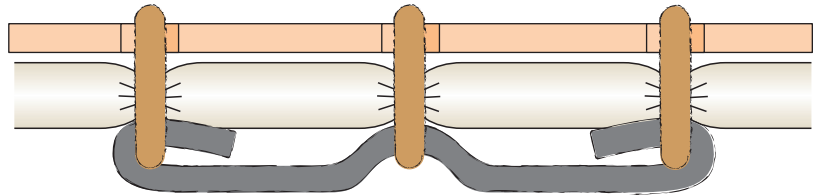
### 文様の布処理

文様を編む場合、布のはじを内側に折って糸をかけます。(写真3)

目数に合わせて、内側に折る分をみて布を切ります。



写真3



黒2目の布の処理

図1

戻りの時に処理される場合も同じように内側に折って糸をかけます。

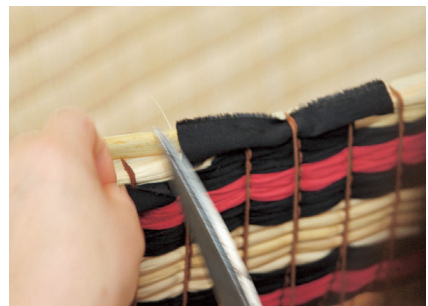


写真4

## ジグザグ文様

布は2 cm幅のものを半分に折って使います。布を長いまま下げて使います。(写真5)

最初のジグザグ文様は、右から数えて6・16・26列目の3ヵ所に布を入れます。12段後に編まれるジグザグ文様は、1・11・21・31列目の4ヵ所に。これを交互に繰り返します。(写真2-②)

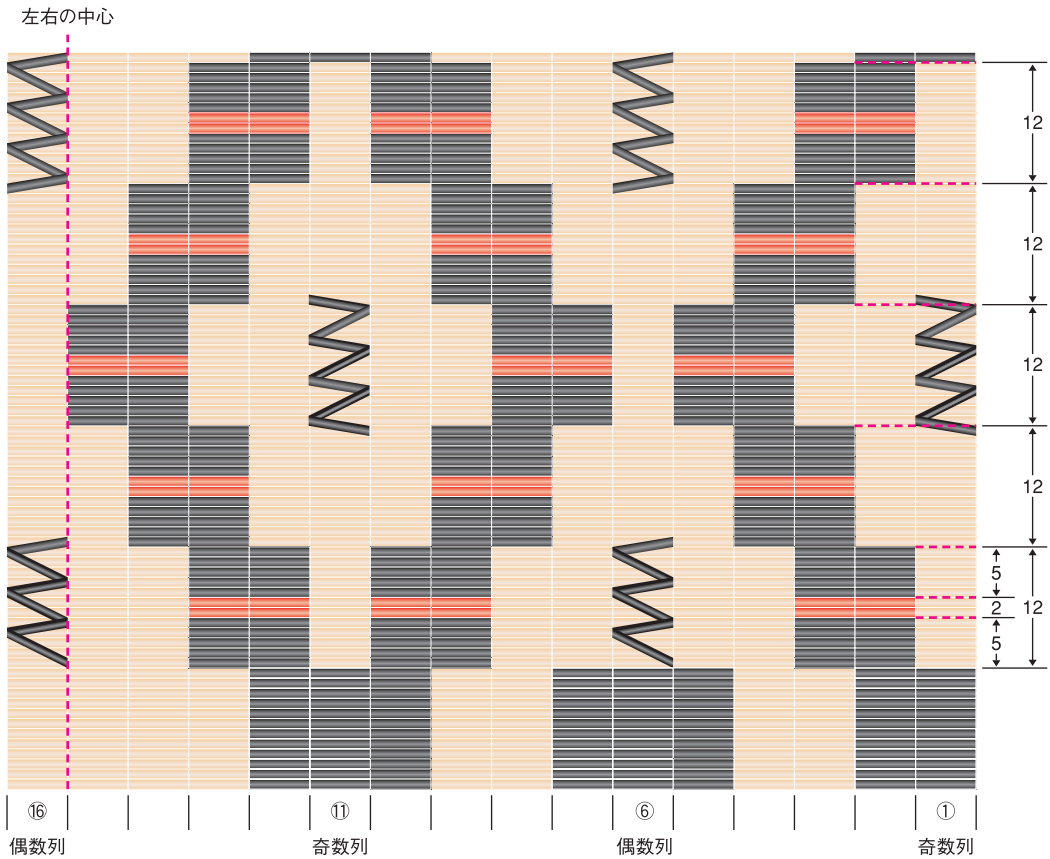


図2

右から「行き」の時に入れた布は、5段編むまで長いままにしておきます。



写真5

左から「戻り」の時にかける糸は、布の外側になるようにします。ガマを5段編んだら、布を持ち上げます。



写真6-1



写真6-2



写真6-3

布が右上がり、左上がりになる場合も同じ要領で糸をかけます。

奇数列で入るジグザグ文様の布は右上がりになります。  
偶数列で入るジグザグ文様の布は左上がりになります。



写真7

13段編む中で、斜めに布が上がるのは3回です。

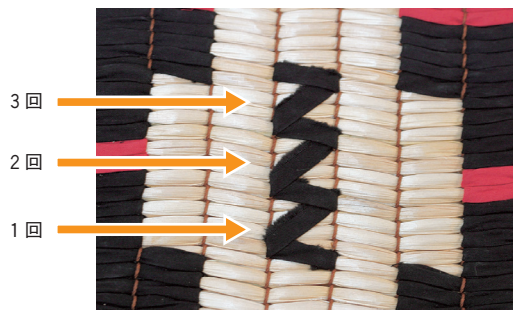


写真8

ジグザグ文様を終える時は布を切り、はじを内側に折って処理します。  
布が途中で足りなくなった場合も同じように一度止め、新たに長い布を入れます。

最後のジグザグ文様は、1段少ない4段で締めます。



写真9

ジグザグ文様のあと、2段ずつ黒、赤、黒の順に布を入れます。(写真10-①)  
布のはじは、文様編みのように内側に折ることはしません。



写真10

次に、これまで編んだジグザグ文様の延長状7ヵ所にジグザグ文様を編みます。(写真2-③)  
6列ごとに右上がり、左上がりを交互に作るようになります。  
締めめ段は編み始めと同様、黒と赤の布を入れて編みます。(写真2-④)

## たて糸の処理

無地のゴザと同じ要領で、たて糸を処理します。  
チタラペは下げて使うこともあったので、中央に小さな輪を作りました。  
ひもの長さはキナと同様、ゴザをまとめる長さに仕上げます。



写真11

幅94cm、長さ224cmのチタラペが完成しました。



写真13



写真12

---

**計良 智子** (1947年生・白老町出身)

- 1973年 ヤイユーカラアイヌ民族学会創設にかかわり、事務局長を務める。
- 1991年 織田ステノさん宅で1年間暮らしを共にし、ゴザ編みや袋作りなど、アイヌの女の手仕事を学ぶ。
- 1992年 ヤイユーカラの森設立。代表。
- 1994年 「日本民藝館展」でチタラペ（花ゴザ）入選・準入選。
- 1995年 織田ステノさんとの暮らしを綴った「アイヌの四季 ―フチの伝えるところ」を出版する。
- 2001年 「KAMUI-I-PIRKA-RE」出版。



このマニュアルでは、織田ステノさんの家に伝わる技法でキナと、布を使って文様を編み込むチタラペを再現しました。

# ニカブンペ



幅100cm×長さ217cm

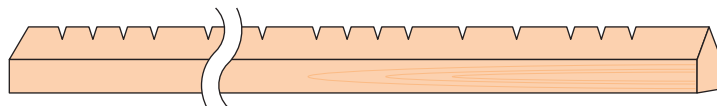
木の皮で文様を編み込んだゴザをニカブンペといいます。儀式で、チタラペと同様に使用したものです。

平取町出身の貝澤竹子さんは、採取してきたものを材料にしてゴザを製作します。

ここでは、ガマの採取・染め・編みを紹介します。

## 道具・材料

- ・編み機
- ・目盛り板 「刻み目」は28



3 cmと4.5cm幅のものが3つずつ交互についている

図 1

- ・たて糸 イテセカ(シナの木の皮を擦ったもの) 28本  
両手を広げた長さの4倍。途中で足すことができる。
- ・錘り石 56個
- ・ガマのふちで擦った糸 1本(120cm)
- ・オヒョウ(黒と茶に染めたもの)(写真1)



写真 1

ガマとオヒョウは、ぬるま湯で扱いやすくしておきます。



写真 2

## 材料の準備

### ガマの採取

貝澤さんは、穂のついた葉は（オスと呼ぶ）硬いので使いません。穂のない葉（メスと呼ぶ）を材料として刈り取ります。



写真 3

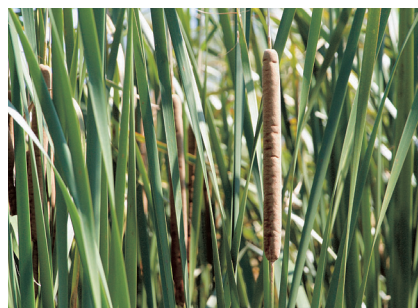


写真 4



写真 5



写真 6

水中にある白い部分が多いほど、厚みのあるゴザを編むことができます。

貝澤さんは質の良いガマを求めて、腰まで水に入ることがあります。

ガマは刈り取り時期が早すぎると弱く、遅すぎると硬くて使うことができません。地域差はありますが、9月の第2週目から3週目が良いといわれています。



写真 8



写真 7



写真 9

一度刈り取った場所のガマが元の太さに戻るには3～4年かかるといわれており、毎年場所を変えて刈る配慮が必要だと貝澤さんはいいます。

刈り取ったガマは、根元から150cmほどの長さに切り  
ます。(写真10)

幅の広いゴザを編む場合は、切らずに干します。

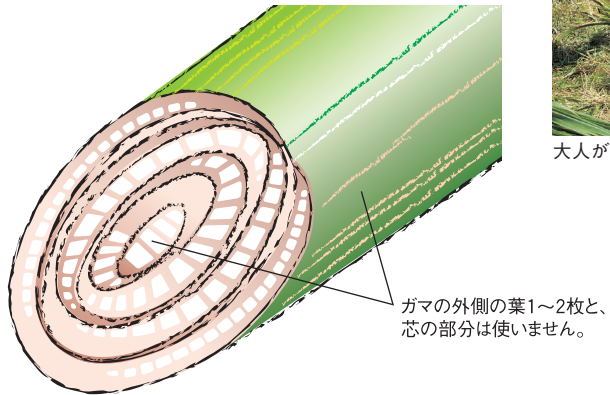


図2

ガマの外側の葉1~2枚と、  
芯の部分は使いません。



大人が両手をひろげた長さが目安

写真10

残り4~5枚ほどの葉を1枚ずつはがすようにとって、内側のぬめりを小川などで洗い流しま  
す。ぬめりを取ることで、乾燥後の変色を防ぎます。



写真11-1

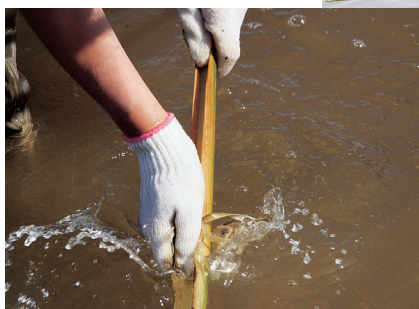


写真11-2

## ガマの干し方

洗い終えたガマを、乾燥させるためにひもで縛ります。(図3)

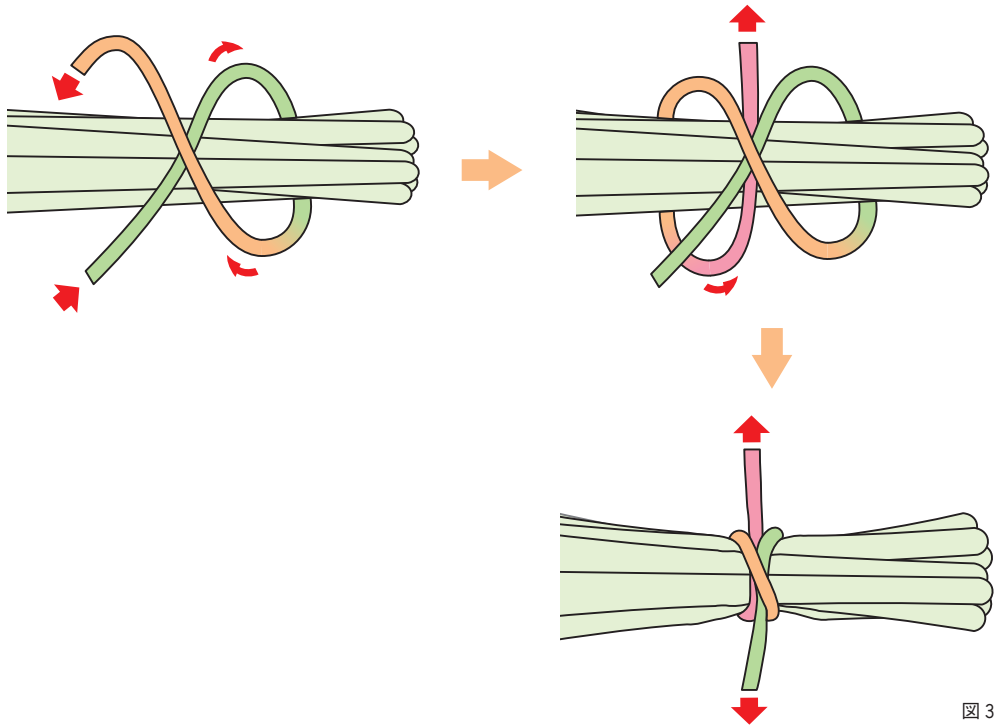


図3

この結び方で縛ると、乾燥と同時に毎日ゆるんでしまう葉の部分をひと縛りでまとめておく事ができます。根元の白い部分が下になるように束ねます。



写真12-1



写真12-2

曇りや雨の日は風通しの良い場所にかける

干す時間は、晴天でも午前9時～午後3時頃までです。まんべんなく陽が当たるように、こまめに向きを変えます。(写真13-2)

晴天が続けば、10日ほどで乾燥します。



写真13-1



写真13-2



10日後



写真14



左：乾燥途中のガマ

右：完全に乾燥したガマ

写真15

## 染め

### 染料をつくる材料

文様に使うオヒョウを黒と茶に染めます。

ゴザの文様部分の色むらを防ぐため、1枚のゴザに必要なオヒョウを一色につき同じ鍋で、一度に染め上げます。染料をつくる段階でオヒョウをいっしょに煮込む方法もありますが、今回は染料を作ってからオヒョウを入れます。

ここでは、黒に染める手順を紹介しますが、茶に染める場合も同じ要領で行います。

#### 黒に染める材料

- ・染料 かしわの葉・オニぐるみの実の皮や腐敗した木の皮  
ハンノキ（ヤチハンノキ）の実  
ケヤマハンノキ（ヤマハンノキ）の実
- ・媒染液 鉄さびと酢で作ったもの
- ・鍋 ステンレス製かホーロー製



かしわ

写真16



くるみ

写真17



ハンノキの実、ケヤマハンノキの実

写真18

### 茶に染める材料

- ・材料 オンコの木屑、ハンノキの皮  
冬のハマナスの小枝や、根の部分を入れると「赤みを帯びた茶」の染料ができるといわれています。
- ・鍋 アルミ製
- ・媒染液 みょうばん  
今回は市販されているものを使用しました。昔は、みょうばん温泉水を使って同じような効果を得ていたといわれています。



写真19

## 染めの手順

沸騰させたお湯に材料を入れ、30分程中火で煮込むと、染料ができます。



写真20-1



写真20-2



黒の染料

写真20-3

できあがった染料に、水洗いしたオヒョウを入れます。(写真20)  
乾燥したままでは、色ムラがでやすくなります。



写真20-4



写真20-5

さらに30分程中火で煮ます。



写真20-6

黒く色づいたら取り出して、水洗いします。



写真20-7

次に媒染液に30分程つけます。  
昔は、金気のある沼地に4～5日つけて同じような効果を得ていたと貝澤さんはいいます。

媒染の働き

- 色止め
- 固着
- 濃く染める



写真20-8

媒染後は水洗いし、最初に作った染料で再び煮込みます。



写真20-9



写真20-10

クルミのもつ色素で、緑がかった深みのある黒に染め上がります。



写真20-11

最後に再び水洗いし、自然乾燥させます。



写真20-12

## 編み方

### 編み始め

貝澤さんは、魔よけのため、編み始めにガマのふちの部分で糸を1本入れて編みます。  
(写真22)

ふちから編み終わりまで、ゴザを囲むように糸がつながることになります。



ガマのふち

写真21



写真22

目盛り板の上に糸、ガマ、オヒョウの順に置きます。(写真23)

オヒョウは幅が広く、はじまで届く長いものを使います。



写真23-1



写真23-2

オヒョウを編む段は、左右どちらの場合も、内側に折って糸をかけます。

1目おきにたて糸をかけて編み進む表編み・裏編みの要領は、キナを編む場合と同じです。



写真23-3

真中で、右から編んできたガマを休め（写真25-1-①）、左からガマを入れます（写真25-1-②）。

オヒョウがたるまないよう、左はじで仮止めしてから作業します。



写真24



写真25-1



写真25-2

真中からは、左から編んできたガマを裏に入れ、1段目に入れた糸がガマとガマの間になるよう編んでいきます。



写真26

1段目の最後に仮止めをはずし、左はじのオヒョウを内側に折って糸をかけます。

1段目の真中で休ませておいたガマは、2段目の作業で2本いっしょに真中から裏編みして処理します。

ガマは2段編み終わりましたが、オヒョウは真中で休ませておきます。



写真27-1



写真27-2

2段目の戻りです。

左からガマを置き、休ませておいたオヒョウをはじめで伸ばし糸をかけていきます。

真中から、ガマは交差して裏側に入れていきます。(写真28)

「行き」と「戻り」ですべての目に糸がかかります。



写真28

## ふちの処理

3段編み終えたところでふちの処理を始めます。

1段目で入れた糸は、ガマと揃えて切ります。



写真29-1

1段目のガマで、糸を包むようにしてを内側にねじります。(写真29-3)

ガマはねじった段階で、長い場合は切り落とします。



写真29-2



写真29-3



写真29-4

裏に出ないように下になるガマを整え、次のガマで押さえます。(写真29-4)



写真29-5



写真29-6

4段目から、毎回ふちの処理をします。  
ねじりの太さが均一になるよう、ガマが太い場合は裂いてねじります。

## 1目ジグザグ文様

黒3段、茶2段を2回くりかえし、合計10段編んだところで、ジグザグ文様を入れます。  
オヒョウの幅はおよそ1.5cmで、長いものを選んで使います。

計良さんのチタラペで紹介したジグザグは5段で文様を作りましたが、貝澤さんの文様は1段ずつ作ります。

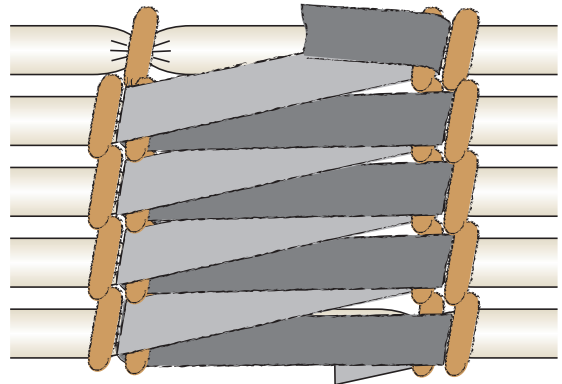


図4

オヒョウの幅を整えながら糸をかけます。



写真30

ジグザグ文様が5ヵ所に入ります。



写真31

ジグザグの部分は、オヒョウが重なっていくので厚みができます。



写真32-1



写真32-2

## 文様をつくる

大小ふたつの菱形からなる文様が中央から広がる文様です。

ゴザの両ふち、菱形の上下に伸びる部分に1目ジグザグが編まれます。

※文様の展開は、図案（49ページ）を参考にしてください。



写真33

オヒョウは編む目数分に、左右の折りこみ分をみて、切り落とします。



写真34-1



写真34-2

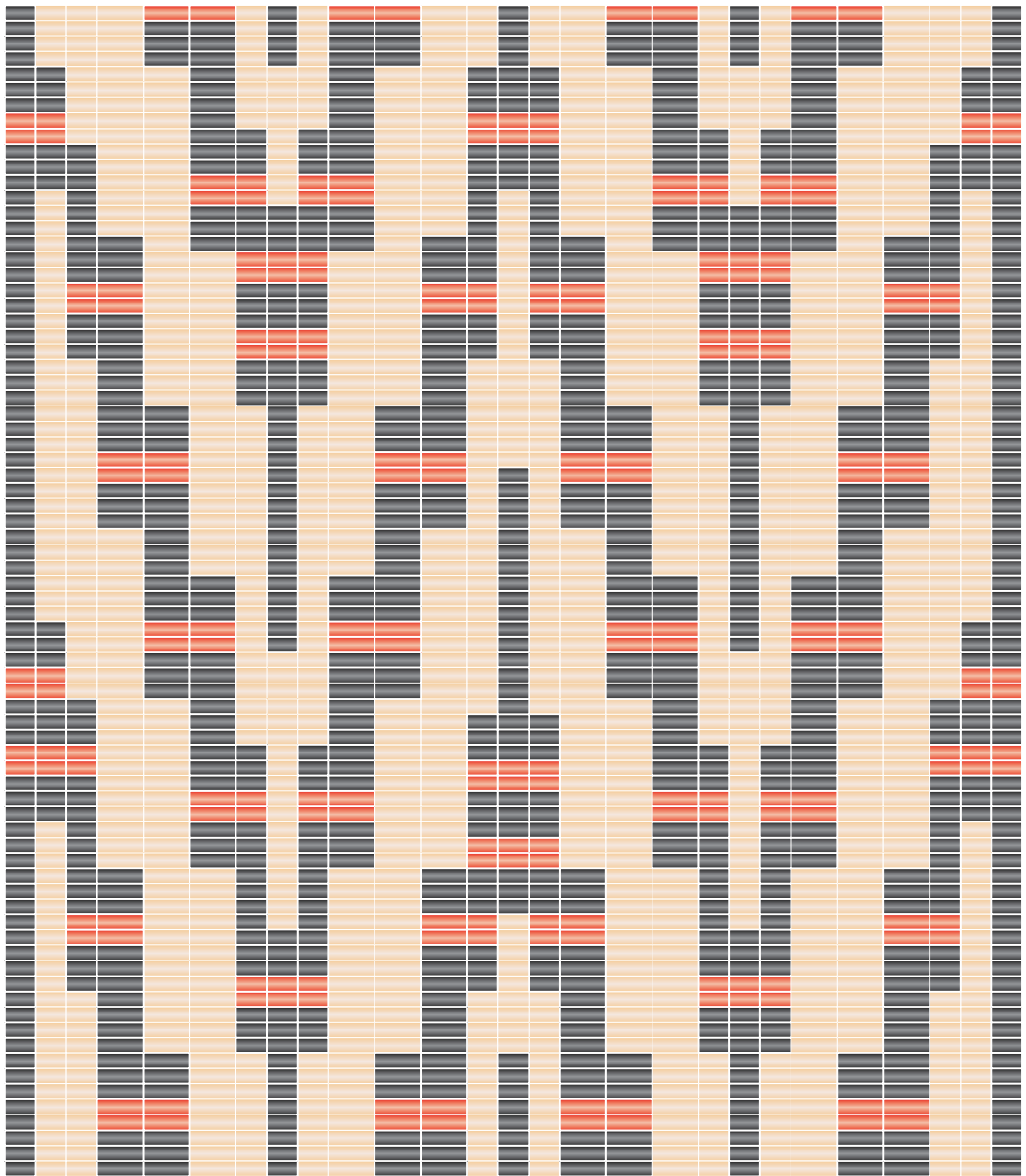


写真33の1/2の図案

図5

オヒョウの切り口は、すべて内側になるよう処理します。



写真34-3



写真34-4

オヒョウが薄い場合は2枚重ねにして、透けない状態で使います。  
※たてにも横にもたたみます。



写真35

次の文様が編めない長さになった場合は、オヒョウを切って一度止め、次の目から新たに長いオヒョウを入れて編みます。

なお、たて糸が短くなり編みにくくなった場合は、足りなくなった所の糸を石からはずし、必要な長さになるまでシナの木の皮を足していきます。

たて糸を足していくことにより、いくらでも大きなゴザを編むことができます。

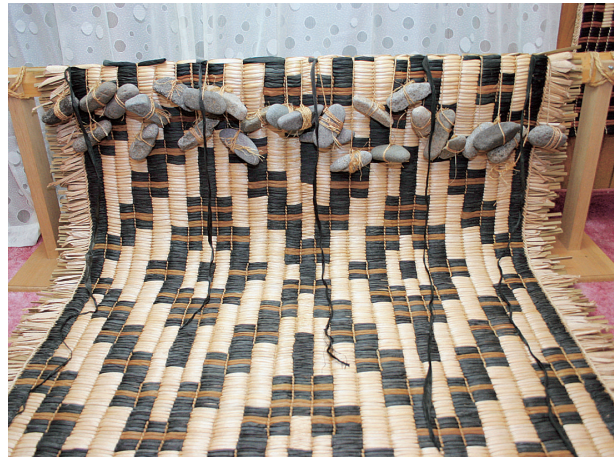


写真36-1



たて糸が短くなった状態

写真36-2



写真36-3

ほどいたたて糸の上に、シナの木の皮を裂いたものをのせます。(図6-①)

左右の人差し指と親指を使って、正面に向かって時計回りにねじり(図6-③)、2本を時計と反対回りに撚っていきます。(図6-④)

足した部分で、飛び出た糸の先は、はさみで切り落とします。



写真37



写真38

糸の足し方にはいろいろありますが、ここでは2種類の方法を紹介します。

図6

①→②→③→④

①→②→④

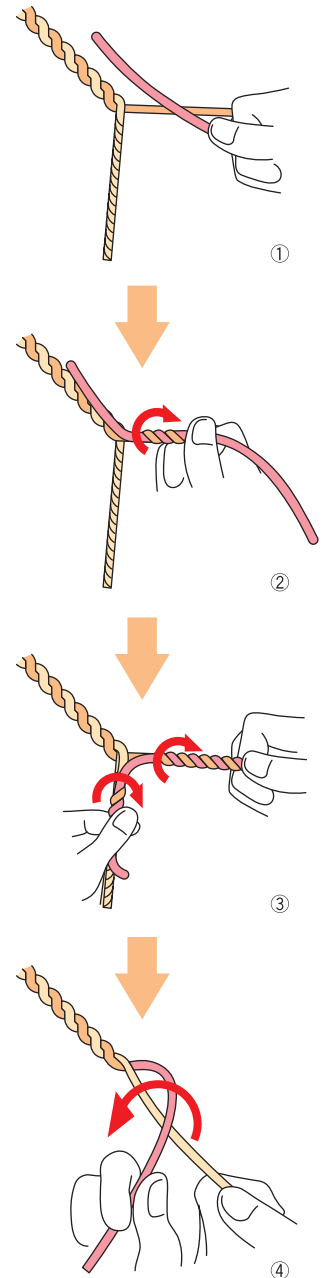


図6

## 編み終わり

編み終わりは、始まりと同じように8段編んで締めます。  
最後の段は、一度にガマの根元の方と先端の方を重ねて使います。

根元の部分が上になるように置きます。



写真39

オヒョウも幅広のものを2枚重ねて使います。



写真40

太いガマで下になったガマを包むようにして編み進みます。



写真41

真中まで表編みします。



写真42

真中からは、下になっているガマを裏編みします。



写真43



写真44

上になっている最後のガマは、真中から左に向かって全部表編みにして終わります。



写真45

最後の段は、全部の目に糸をかけて終わりです。



写真46

編み終わりで、真中8本以外のたて糸が短いほど、最後の糸処理がしやすくなります。長いと糸が太くなり、きれいに仕上がりにません。



写真47



写真48

## たて糸の処理

たて糸は太さがなるべく均等になるように撚って1本の糸にします。1本になった糸を、次の目のたて糸でしばります。

ゴザの真中に向かって同じ作業を繰り返します。



写真49



写真50

真中では、集まった糸を左右4本ずつになるようにします。この8本でゴザをまとめるためのひもを編みます。まるめたゴザの二周り半の長さにします。

今回は8本編みで仕上げますが、縄編みで仕上げる場合もあります。



写真51



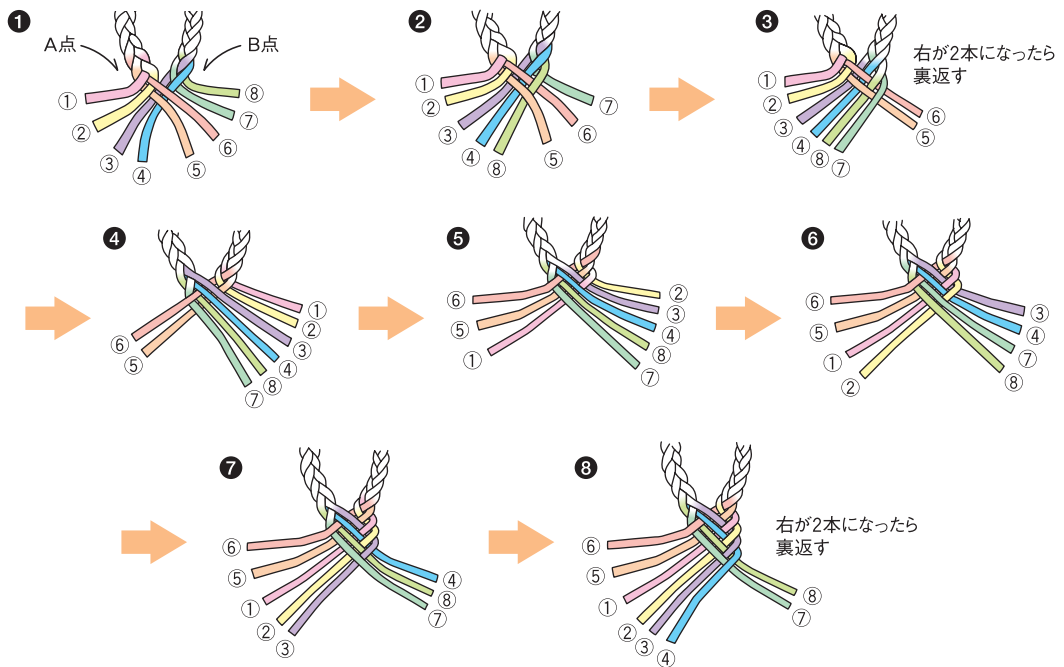
写真52

根元の部分から数段4つ編みした後、長さ70cmになるまで8本編みします。



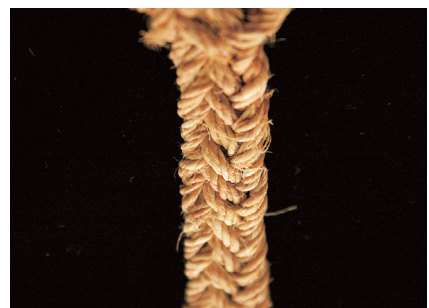
写真53

8本編み



④～⑧を繰り返す

図7



8本編み

写真54

糸が少なくなってきたら8本編みをやめ、1mほど縄編みします。



写真55

ひもの先を結び、結び目の先を切り落とします。



写真56

最後にゴザのふちを切り落とします。



写真57



写真58

幅100cm、長さ217cmのニカプンベの完成です。この大きさのものは、イナウソまたはボンニカプンベとも呼ばれていました。

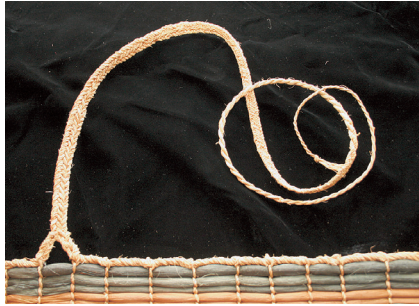


写真59



写真60

### 貝澤 竹子 (1955年生・平取町出身)

- 1999年 財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構「アイヌ工芸作品コンテスト」で優秀賞を受賞する（2001年まで3年連続受賞）。
- 2000年 社団法人北海道ウタリ協会「アイヌ伝統工芸展」で最優秀賞を受賞する。
- 2002年 財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構の「伝統工芸師」に認定される。  
社団法人北海道ウタリ協会「アイヌ伝統工芸展」で優秀賞を受賞する。
- 2003年 社団法人北海道ウタリ協会「優秀工芸師」に認定される。



幼少の頃からアットゥシ織や糸づくりなど、アイヌ工芸に携わる。

アットゥシ織や糸づくりは祖母と母から、刺繍は義姉から、ゴザ編みは祖母と夫にそれぞれ教わり、伝承活動だけでなく創作活動も行っている。

このマニュアルでは、アイヌがすべての材料を自然の中で調達していた時代と同じようにガマを採取し、草や木の皮、実などを使って染めたオヒョウを使ってニカプンベを再現しました。

## おわりに

ゴザは、アイヌの人たちの生活を豊かなものにしました。無地のゴザは、敷物として日々の生活に温かさを提供するものであり、文様入りのゴザはただ美しいというだけではなく、特別な役割を持っていました。すなわち、アイヌの女性は日々の生活のなかで「美」を創り出してきましたが、それらの多くは神々と密接なつながりを持つもので、文様入りのゴザもまた儀礼の場での使用という、神々とのつながりを持つものであり、人間の日々の生活に潤いをもたらすものでもありました。

アイヌの女性が創り出すさまざまな文様のなかで、ゴザに施された文様は、唯一「直線の美」ともいえるものであり、着物などに施される曲線の文様とは対称的なもので、こうした文様の彩りは、アイヌの女性の創造性が豊かなことの証であります。

独創性に富んだ文様は、その製作技術とともに母から子へと代々受け継がれ、現代に至っており、いま、私たちが目にする文様に、伝統の美を見ることができます。

## 参 考 文 献

ゴザを製作するにあたって参考となる文献をいくつか紹介します。

### ◎ゴザの製作過程などを記した文献

#### ●旭川龍谷高等学校郷土部

1974：『上川アイヌの研究 その7 —chitarape（花ゴザ）を編んで—』旭川龍谷高等学校郷土部  
(1974：『北海道の文化』30 北海道文化財保護協会 所収)

#### ●貝澤美和子

2005：『イテセ（ゴザ編み）—シキナ活用の調査研究—』平成16年度財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構研究助成成果報告書（2005：『アイヌ関連総合研究等助成事業研究報告』5 財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構 所収）

### ◎これまでに製作されたゴザの写真などが掲載されている文献

#### ●青森市歴史民俗展示館「稽古館」

2002：『自然と共存したアイヌの人々』特別企画展図録 青森市歴史民俗展示館「稽古館」

#### ●旭川市博物館

2002：『旭川市博物館所蔵品目録』Ⅻ 民族資料／住居関係 旭川市博物館

#### ●萱野茂

1978：『アイヌの民具』すずさわ書店

#### ●国立民族学博物館編

1993：『アイヌモシリ—民族文様から見たアイヌの世界—』国立民族学博物館

#### ●財団法人アイヌ民族博物館編

1991：『児玉資料目録Ⅱ』財団法人アイヌ民族博物館

1992：『田中忠三郎コレクション目録』財団法人アイヌ民族博物館

#### ●財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構

2000：『収藏品目録』1 財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構

2001：『収藏品目録』2 杉村資料1 財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構

2003：『収藏品目録』3 財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構

#### ●東京国立博物館編

1992：『東京国立博物館図版目録』アイヌ民族資料篇 東京美術

#### ●名寄市北国博物館

2003：『民族資料目録—佐藤上州氏・柴田時雄氏 寄贈資料—』名寄市北国博物館所蔵資料目録1  
名寄市北国博物館

#### ●平取町立二風谷アイヌ文化博物館編

2003：『北海道二風谷及び周辺地域のアイヌ生活民具コレクション』国指定重要有形民俗文化財調査報告書 平取町教育委員会

## ゴザを収蔵・展示している施設

ゴザを収蔵・展示している博物館・資料館のいくつかを紹介します。

### ◎北海道内

- |                     |                            |
|---------------------|----------------------------|
| ●アイヌ総合センター          | 札幌市中央区北2条西7丁目 かでの2・7       |
| ●アイヌ民族博物館           | 白老町若草町2-3-4                |
| ●旭川市博物館             | 旭川市神楽3条7丁目<br>旭川大雪クリスタルホール |
| ●浦河町立郷土博物館          | 浦河町西幌別273-1                |
| ●帯広百年記念館            | 帯広市緑ヶ丘2                    |
| ●萱野茂・二風谷アイヌ資料館      | 平取町二風谷                     |
| ●川村カトリックアイヌ記念館      | 旭川市北門町11丁目                 |
| ●釧路市立博物館            | 釧路市春湖台1-7                  |
| ●サッポロピリカコタン         | 札幌市南区小金湯27                 |
| ●静内町アイヌ民俗資料館        | 静内町字真歌7-1                  |
| ●弟子屈町屈斜路コタンアイヌ民俗資料館 | 弟子屈町字屈斜路市街1条通11            |
| ●苫小牧市博物館            | 苫小牧市末広町3-9-7               |
| ●名寄市北国博物館           | 名寄市字緑丘222                  |
| ●函館市北方民族資料館         | 函館市末広町21-7                 |
| ●北海道開拓記念館           | 札幌市厚別区厚別町小野幌53-2           |
| ●北海道大学植物園・博物館       | 札幌市中央区北3条西8丁目              |
| ●北海道立北方民族博物館        | 網走市潮見309-1                 |
| ●平取町立二風谷アイヌ文化博物館    | 平取町二風谷55                   |
| ●幕別町蝦夷文化考古館         | 幕別町千住114-1                 |

### ◎北海道外

- |                  |                |
|------------------|----------------|
| ●東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館 | 仙台市青葉区国見1-8-1  |
| ●東京国立博物館         | 東京都台東区上野公園13-9 |
| ●国立民族学博物館        | 吹田市千里万博公園10-1  |

\*ほかにも収蔵・展示している施設があります。下記の書籍を参照してください。

- 財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構編  
2005：『パイエアン ロ』アイヌ文化体験学習ガイド  
財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構

アイヌ生活文化再現マニュアル  
編む ―ゴザ―

---

2006年3月 発行

発行 財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構

〒060-0001

北海道札幌市中央区北1条西7丁目

プレスト1・7 (7階)

TEL (011) 271-4171 / FAX (011) 271-4181

本書の内容の一部または全部を無断で複写複製（コピー）することは、法律で禁止されていますので、あらかじめ財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構あてに許諾をお求めください。



